

氏 名	こ 湖 中 真 哉
学位(専攻分野)	博 士 (地域研究)
学 位 記 番 号	論 地 博 第 3 号
学位授与の日付	平 成 18 年 3 月 23 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 4 条 第 2 項 該 当
学 位 論 文 題 目	牧畜社会における生業経済と市場経済の併存的複合化に関する研究 ——ケニア中北部のサンプル社会を事例として——
論文調査委員	(主 査) 教 授 太 田 至 教 授 市 川 光 雄 助教授 重 田 真 義

論 文 内 容 の 要 旨

東アフリカの乾燥地域には、牧畜を主たる生業として暮らしてきた人びとが分布しているが、政府や開発機関による開発援助計画の実施や経済のグローバル化の進行にともなう、現在、この地域には市場経済が急速に浸透している。本学位申請論文は、ケニア共和国中北部のサンプル社会を対象として、この地域の経済的・社会的な変動過程を、生業経済と市場経済が複雑に絡み合いながら併存的に複合化する過程として把握し、その様相の記述と分析をおこなったものである。

この地域では、ケニア政府や先進国の開発援助機関によって、特に1980年代の中頃からさまざまな開発政策が実施されてきたが、なかでも1991年にスグタ・マルマルの町に家畜の定期市が開設されたことは、地域の経済に非常に大きな影響をおよぼすことになった。本論文は、こうした状況のもとでサンプルの人びとが在来の経済的・社会的体系をどのように変革しつつ、新しい事態に対処してきたのかを解明している。

本論文の第1章では、研究の理論的な枠組みが提示される。社会の変容をあつかってきた従来の研究では、伝統と近代を二者択一的にしか把握してこなかった点を批判的に検討し、両者の併存的・複合的な絡み合いの様相を、地域的なコンテキストに即して分析すべきであると提起している。

第2章では、研究対象となるサンプル社会全体と、開発援助政策の実施にともなう経済的・社会的な変容の歴史が概観されている。そして第3章では、スグタ・マルマルの家畜市における合計362例の家畜取引が分析されている。その結果、人びとが家畜を売却する理由は、食料などを購入するためだけではなく、自分の家畜群の増大を目指して未経産メスなどの家畜を購入するためであることが明らかになった。すなわち売却された家畜は、現金を介して再び家畜に変換されている。サンプルの人びとは従来から一定のレートに従って家畜を交換する体系をもち、必要に応じて家畜同士を交換してきたが、家畜市の開設以降には、この交換体系に市場交換を併存的に組み込んでいる。

第4章では、あるサンプルの家畜商の2年間にわたる取引事例(1,113頭)が分析されている。その結果、家畜商は値段の地域間の格差や季節的な変動などを利用して、頻繁に家畜の売買を繰り返して利益を産出していることが明らかになった。また、家畜商は家畜の値段が低迷したときには家畜の肥育に専念したり、商売による利益を家畜に投資することによって自分の家畜群を増大させようと試みている。すなわち、家畜商の活動と在来の生業経済とは相互に深く絡み合い、融合している。

第5章では、サンプルの二つの世帯を対象として、それぞれ1年間にわたる現金と家畜との収支が分析されている。その結果、平均的な世帯においては、乾期には現金によって購入した穀物に依存しているが、雨期には家畜のミルクを中心として食生活を自給していること、すなわち、季節の変動に対応して家畜と現金の二重の消費を併存させる仕組みをつくりあげていることが明らかになった。

以上の分析から現在のサンプル社会では、生産・交換・消費の各過程において、生業経済と市場経済とが複雑に絡み合いながら併存していることが明らかになった。この社会において家畜は、「対内的」で「非商業的」な貨幣として機能してきたが、市場経済の浸透とともに、人びとは、家畜と現金を比喩的な思考によって類似したものと認識し、相互に変換しつつ、

社会的なコンテクストに応じて使い分けている。そして、彼らが最終的な目標としているのは、貨幣を媒介としつつ家畜群を増大させることであり、家畜は経済のグローバル化から地域共同体の福利を保護する地域通貨の役割を担っている。

論文審査の結果の要旨

東アフリカの牧畜諸社会では、経済のグローバル化や開発援助計画の実施などにもなって市場経済が急速に浸透しているが、こうした状況のもとで、人びとがどのようなローカルな対応をしているのかを解明することは、この地域の研究にとって重要な課題のひとつである。本論文は、ケニア中北部に分布するサンプル社会に焦点をあてて、経済的・社会的な変動過程を、生業経済と市場経済が複雑に絡み合いながら併存的に複合化する過程として把握し、その様相の記述と分析をおこなった地域研究である。

サンプルの人びとは牧畜を主たる生業手段としてきたが、1980年代以降、さまざまな開発援助政策の実施などによって、その経済生活は大きく変容しつつある。本論文では、当該地域に開設された家畜市における家畜の取引、地元の家畜商が営んでいる家畜の売買、世帯における家計という三つの主題をとりあげて、丹念な記述がおこなわれている。そしてサンプル社会では、生産・交換・消費の各過程において生業経済と市場経済が複雑かつ独特な方法で組み合わせられて併存していることが、定量的・定性的な諸資料の詳細な分析をとおして論じられている。また、この社会において家畜は「対内的」で「非商業的」な貨幣として機能してきたが、市場経済の浸透にもなって、人びとは家畜と現金を比喩的な思考によってゆるやかに接合し、社会的なコンテクストに応じて使い分けていることが解明されている。そして、サンプルの人びとが最終的な目標としているのは、現金を媒介としつつ家畜群を増大させることであり、家畜は、経済のグローバル化から地域共同体の福利を保護する地域通貨の役割を担っていると結論されている。

本論文は、以下の3点において高く評価できる。第一には、東アフリカ牧畜社会研究に対して重要な貢献をなしたことである。本論文では、人びとが家畜市でおこなっている家畜の売買や家畜商が営む商売について、詳細な定量的資料が提示されている。この地域における家畜の売買に関しては、このように克明な資料を提出して精緻な分析をおこなった研究は今までは存在しない。本論文は第一級の資料を収集・分析することによって、従来の家畜の交換体系に市場交換が組み込まれていることや、家畜商が牧畜と商業を相補的に営んでいること、そして、現金の消費と家畜の消費とを組み合わせた新たな消費の仕組みがつけられていることを総合的に解明している。

本論文が高く評価できる2点目は、理論的な貢献である。本論文は、経済人類学や経済史、開発経済学、農村経済論などの学問分野における諸理論を綿密に検討したうえで、自分が収集した資料を、諸理論との関連において分析して議論を組み立てることによって、市場経済と生業経済の併存的な複合化という視座を明確に提示している。さらに本論文は、地域住民があらたな生産と交換、消費の活動を創出していることを、住民の立場から内発的發展論として展開している。グローバルな市場経済の周辺部に位置している地域社会の人びとが、開発援助計画の実施や経済のグローバル化のもとで外部からもたらされる急速な変化にどのように対処しているのかを解明することは、東アフリカに限らず地域研究にとって重要なテーマのひとつであり、本論文が提示した理論的な枠組みは、他地域における研究にも大きな指針を与えられらる。

本論文が高く評価できる3点目は、研究手法にかかわるものである。すなわち本論文では、長期にわたるフィールドワークによって収集した定量的・定性的資料を相互補完的に組み合わせることによって、対象社会の状況に応じた有効な研究手法が工夫されている。

よって、本論文は博士（地域研究）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成18年1月13日、論文内容とそれに関連した事項について試問した結果、合格と認めた。